

小中一貫校・非一貫校における子どもの適応・発達(1)

一学校適応感・精神的健康に注目して

○ 高坂康雅 (和光大学)
岡田有司 (高千穂大学)

都筑 学 (中央大学)

問題と目的

近年、全国的に公立小中一貫校の設置が行われている。その目的は、小・中学校間の連携・連続性を高め、「中1ギャップ」を解消し、児童生徒の学校適応感や精神的健康を向上させることにある。しかし、実際に、小中一貫校が非一貫校に比べ児童生徒の学校適応感や精神的健康を促進しているという実証的な検討は行われていない。

そこで、本研究では、学校適応感と精神的健康について、小中一貫校と非一貫校の比較検討を行うことを目的とする。

方 法

調査対象者 公立小中一貫校に在籍する児童生徒 2269 名と非一貫校に在籍する児童生徒 6528 名を調査対象者とした。

調査時期 2013 年 5 月～2014 年 1 月に調査を実施した。

調査内容 (1)学校適応感：三島(2006)の階層型学校適応感尺度の「統合的適応感覚」3 項目を使用した。

(2)精神的健康：西田・橋本・徳永(2003)の児童用精神的健康パターン診断検査(MHPC)の 6 下位尺度(「怒り感情」、「疲労」、「生活の満足度」、「目標・挑戦」、「ひきこもり」、「自信」)各 2 項目を使用した。

結果・考察

統合的適応感覚及び MHPC6 下位尺度について、学校形態(一貫/非一貫)×学年(4 年～9 年(中 3))の 2 要因分散分析を行い、交互作用が有意であった場合は、単純主効果の検定を行った。以下では、

小中一貫校と非一貫校との間で有意な差がみられた箇所を中心に結果を記述する。

まず、統合的適応感覚では交互作用が有意であり、4 年・5 年において、非一貫校の方が一貫校よりも得点が高かった(Figure 1)。

MHPC の「目標・挑戦」でも交互作用が有意であり、4 年・5 年・6 年において、非一貫校の方が一貫校よりも得点が高かった。また、「自信」でも交互作用が有意で、4 年・5 年・6 年において、非一貫校の方が一貫校よりも得点が高かった(Figure 2)。

「疲労」、「ひきこもり」、「生活の満足度」では、学校形態の効果が有意であり、「疲労」と「ひきこもり」では一貫校の方が高く、「生活の満足度」では、非一貫校の方が高かった。

これらの結果から、全体的には、小中一貫校よりも非一貫校の方が学校適応感も精神的健康も高いことが明らかとなった。特に、小学校時点では、学校適応感や「目標・挑戦」、「自信」は非一貫校の方が高かったが、換言すれば、非一貫校の場合、中学生になると、適応感や「生活の満足度」、「自信」は一貫校と同程度まで低減する。このような低減が一貫校ではみられないという点では、「中1ギャップ」の解消に一定の効果がある可能性もあるが、一方で、一貫校における小学校時点での学校適応感や精神的健康の低さがなぜ生じているかは今後検討する必要がある。

付記：本研究は、科学研究費助成事業(基盤研究(B)課題番号 24330858：代表・梅原利夫)の助成を受けたものである。

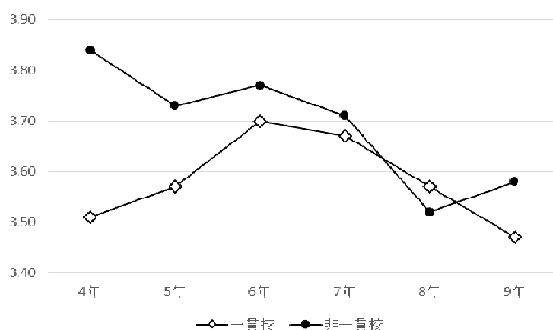


Figure 1 「統合的適応感覚」の推移

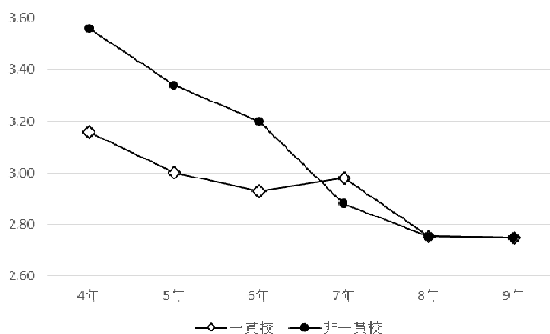


Figure 2 「自信」の推移